

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月14日現在

機関番号：14301

研究種目：基礎研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520247

研究課題名（和文） 亡命知識人と戦後アメリカ—越境と相互浸透

研究課題名（英文） Refugee Intellectuals in Postwar America: Crossing of Borders and Transfusion of Ideas

研究代表者

前川 玲子 (MAEKAWA REIKO)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：30190292

研究成果の概要（和文）：

本研究は、1930年代に亡命者としてアメリカに渡ったヨーロッパ系知識人たちが、第二次世界大戦後にアメリカ知識人およびアメリカ文化・社会との葛藤、対話、交渉などを経て、独自の学問研究、および創作活動を行っていく過程を検証した。国家、言語、文化、学問領域の越境と相互浸透の過程で、異種混交的な斬新なスタイルや言語空間が生み出されていく経過と、その背景を、思想、文学、映画学という三つの側面から分析した。我々は、こうしたプロセスが、第二次世界大戦から冷戦へと続く緊張した文化状況のなかで進行したことに注目し、不確実性と周縁性のなかで常に生きること強いられた亡命知識人が、流動的な国際情勢のなかに身を置きつつ、同時にアメリカの論壇、文壇、映画の常識を破るような新たな境地を開いていったことを、それぞれに立証していった。

研究成果の概要（英文）：

This study explores how refugee scholars who fled the spread of fascism in Europe in the 1930s and 1940s transplanted their ideas and thoughts into the American soil through the personal and intellectual networks formed between them and American intellectuals in and after the Second World War. With a fresh look at such diverse areas as social sciences, literature, and cinema, we closely examine the intricate process of transmission and hybridization of ideas. We try to show how this process took place in the politically volatile milieu under the shadow of the Cold War and how their experiences of surviving in an uncertain situation made them particularly responsive to the fluidity of the international situation and motivated them to pursue a new path in their academic inquiry as well as their creative activities. Just as they crossed national, linguistic and cultural borders in their personal lives, they crossed disciplinary borders and came to their academic or creative maturity, transforming themselves from refugees into cosmopolitan scholars in the USA.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：亡命知識人、アメリカ知識人、ウラジーミル・ナボコフ、映画学、越境、戦後アメリカ、冷戦、亡命作家

1. 研究開始当初の背景

過去の日本国内の学術研究において、アメリカの亡命知識人は、アメリカ文学・文化研究のなかでも比較的、注目されなかった分野であった。先行研究では、特定の専門領域における個々の知識人の業績に焦点があり、亡命知識人の集団としての動き、大西洋を超えた知の越境、異文化の接触による相互浸透過程とそこに生まれたハイブリッドな文化の創造という全体的見取り図は示されてこなかった。

2. 研究の目的

日本、および欧米での研究成果を踏まえながら、日本の亡命知識人研究でこれまで欠如していた全体的視座と知識人と社会・文化環境との相互関係を踏まえた学際的研究を試みることが、本研究の目的である。特に、個々の知識人の学問、創作活動が成熟期へと向かう戦後に焦点をあて、アメリカに多くの文化的足跡を残した亡命知識人たちの知的、美的な世界観の深層を探ることで、広い意味での文化・文学研究に資するものとする。

3. 研究の方法

(1) 第二次世界大戦から1960年代頃までにかけてアメリカ文化に重要な影響を与えた亡命知識人の歴史を、文学、歴史、政治、大衆文化の分野にわたって幅広く文献を渉猟し、できるだけ精密なデータ・ベースの作成を行っていく。

(2) 研究代表者は、国内外のアーカイブの資料なども使い、主に思想、歴史、政治分野の文献の検証を行う。研究分担者は、文学テキストの精密な読みと分析を通じた文学分野の検証、さらに大衆文化とくに映画分野の文献および映像化されたテキストの分析を行っていく。

(3) 研究代表者と二人の分担者の知見を持ち寄り、亡命知識人たちが、戦後のアメリカに出現した高度資本主義社会の中で人間の欲望と疎外に対していかなる観察を行い、新しい思想的、文学的、映像的パラダイムを切り開いていったのかについて討議し、国内外で発表する。

4. 研究成果

(1) 亡命知識人に関する内外の文献の整理・分析および人文・社会科学、文学、映画という個々の分野における亡命知識人関係のデ

ータの収集と分析は順調に進み、今後の日本における亡命知識人研究の活性化を促す基礎資料を提供するであろう。

(2) 個々の研究者による亡命知識人研究はそれぞれの独自の成果を生み出し、これまで未開拓であった領域を広げる役割を果たした。

① 研究代表者（前川）は、亡命知識人の援助を行ったロックフェラー財団のアーカイブの調査、分析を通して、冷戦中の文化的自由会議の活動における亡命知識人の役割、またゲールハート・コラムを中心とした経済的共存の研究、フランツ・ノイマン、ハンナ・アーレントなどの法・政治哲学研究に対する助成金などをテコとした財団の影響力の継続の意味について分析した。また、ハーバード大学神学大学院のアーカイブ調査を通して、亡命神学者パウル・ティリッヒの足跡を追い、かつこれまであまり実態の知られていなかった民主的ドイツ推進協議会についても一次資料をもとに分析した。さらに、南部に移住、定住した知識人に関する研究を行うことで、これまでニューヨークやロサンゼルスに定住した一部の著名な亡命知識人に偏っていた研究に、地理的バランスを与えるとともに、亡命知識人とアフリカ系アメリカ人との知的交流の歴史にも光を当てようとした。これらの成果の一部はロックフェラー図書館のウェブ上のリサーチ・ペーパーとして掲載されている。そのほかの成果は、大学の紀要論文にまとめている。

② 研究分担者（若島）は、ロシアからの亡命文学者として有名なウラジーミル・ナボコフの研究において、彼の未完長編ローラのオリジナルを本邦初訳するという成果を上げた。さらに、それに関して英語で発表された論文は、フランスの文芸誌に仏訳出版され、そのナボコフ研究は国際的な広がりを見せた。また2010年3月に京都で開催された国際ナボコフ学会では、代表作ロリータに関する研究発表を行い、後に論文としても発表されている。著書や論文の発表ばかりではなく、内外の学会でナボコフを中心とした亡命作家研究の最新成果を発信していったことは、我が国における亡命知識人研究にとって重要であった。全体として、本研究のキーワードの一つである越境とナボコフの研究との有機的関係に迫るものと

- して、亡命作家研究に新境地を開いた。
- ③ 研究分担者（加藤）は、文化の越境の問題を、映像文化の分析を通して分析した。具体的には、古典的ハリウッド映画の1920年代の日本映画に対する影響のリーサーチを通して、文化的越境、相互浸透に関する理論的および実証的枠組み研究を行った。さらに、アメリカの映画史のなかで重要な歴史的役割を負った移民および1930年代の亡命知識人に光を当てる研究も行った。特に、1900年代初頭から1950年代末までのアメリカ映画の主要ジャンルであった西部劇映画と、列車映画との関係を、アメリカの近代技術と文化および西部開拓史の相互関連、さらに芸術映画と大衆映画との相互浸透過程などの省察を通して分析した。全体として、アメリカ映画研究および文化・社会史研究という大きな枠組みのなかで、ハリウッド映画の隆盛期を作り出した亡命知識人の位相を俯瞰するというアプローチが、亡命知識人研究に新しい知見をもたらした。これらの成果はいずれも著書の形で結実している。

(3) 研究代表者および分担者は、こうした個別の研究を踏まえながら、戦後の亡命知識人が、アメリカ社会およびその政治体制、さらには知的風土に対し、親和と反発のアンビバレントな関係をもつにいたったことを確認した。さらに、彼らの周縁的で批判的な視座故に、アメリカの既成の論壇、文壇、大衆文化の常識を覆すような新たな分野を開拓していった可能性についても議論を重ねた。また、彼らの知的、創造的な発展を促し、思想的ハイブリディティを可能にする要素がアメリカの知的・文化的環境の中に内在したのかどうかについても、個々の知見を持ち寄った。こうした議論をさらに整理し、総括する必要があるが、亡命知識人研究をわが国で進めるうえでの多様なアプローチの可能性と問題点は明確化され、今後のさらなる発展にむけての基盤研究の役割を果たした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

- ① 前川玲子、知られざる亡命知識人—南部での経験、英文学評論、査読無、84巻、2012、pp. 69-99、
<http://hdl.handle.net/2433/154564>
- ② 若島正、『ロリータ』と英国大衆小説—グリン＝ゴードン論争の背景をめぐって、若島正他編『書きなおすナボコフ、読み直すナボコフ』、研究社、査読無、2011、

pp. 65-81

- ③ 前川玲子、境界線上の亡命知識人—パウル・ティリッヒと大戦間期のアメリカ、英文学評論、査読無、83巻、2011、pp. 89-113、
<http://hdl.handle.net/2433/138545>
- ④ 前川玲子、パウル・ティリッヒと民主的ドイツ推進協議会、社会システム研究、査読無、14巻、2011、pp. 1-17
- ⑤ 若島正、un azur lointain、Revue des deux mondes、査読有、2011、pp. 141-147
- ⑥ 若島正、Another Road to Lolita: A Transatlantic View、The Proceedings of the International Nabokov Conference、査読無、2010、pp. 157-162
- ⑦ 前川玲子、戦争と知識人（ランドルフ・ボーン）—翻訳と解題、英文学評論、査読無、82巻、2010、pp. 59-91、
<http://hdl.handle.net/2433/135364>
- ⑧ 前川玲子、アメリカ文学における知性と反知性の構図—James, Steinbeck, Warrenの描く医師の姿をとおして、I V Y、査読有、43巻、2010、pp. 81-105
- ⑨ 若島正、彼方の青空—ナボコフの遺作をめぐって、図書、査読無、2月号、2010、pp. 2-5
- ⑩ 前川玲子、The Rockefeller Foundation and the Intellectual life of Refugee Scholars during the Cold War、The Rockefeller Archive Center Research Papers、査読有、2009、pp. 1-14、
<http://www.rockarch.org/publications/resrep/maekawa.php>
- ⑪ 若島正、『私』の消し方—ナボコフの未完長編『ローラのオリジナル』、群像、査読無、11月号、2009、pp. 106-117

〔学会発表〕(計11件)

- ① 若島正、Looking Backward: 2010-2012、The International Nabokov Conference、2012年1月11日、The University of Auckland, New Zealand
- ② 若島正、ナボコフと読者たち、早稲田大学英文学会年次大会、2011年11月26日、早稲田大学
- ③ 若島正、ナボコフと読者たち、同志社大学英文学会年次大会、2011年10月30日、同志社大学
- ④ 若島正、ナボコフの自伝『記憶よ、語れ』を読む、日本マーク・トウエイン協会全国大会、2011年10月7日、近畿大学
- ⑤ 若島正、ナボコフと越境、GCOE総合博物館市民セミナー、2011年7月16日、北海道大学
- ⑥ 若島正、ナボコフの自伝『記憶よ、語れ』を再読する、中・四国アメリカ文学会支部大会、2011年6月11日

- ⑦ 前川玲子、ホーフスタッターの『アメリカにおける反知性主義』—その知的起源と政治的背景、アメリカ学会年次大会、2011年6月4日、東京大学駒場キャンパス
- ⑧ 若島正、Gene Wolfe の超短編 “Sir Gabriel” を読む、日本英文学会全国大会、2011年5月22日、北九州大学
- ⑨ 若島正、Another Road to Lolita: A Transatlantic View、The International Nabokov Conference in Kyoto、2010年3月26日、コープイン京都
- ⑩ 前川玲子、アメリカ文学における知性と反知性の構図、名古屋大学英文学会クリスマス・セミナー、2009年12月18日、名古屋大学
- ⑪ 前川玲子、ユートピア/ディストピアをめぐる20世紀の知的言説—Lewis Mumford, Karl Mannheim, George Orwell を中心に、アメリカ学会年次大会、2009年6月7日、津田塾大学

[図書] (計8件)

- ① 若島正、他、研究社、書きなおすナボコフ、読みなおすナボコフ、2011、364
- ② 若島正 (訳)、作品社、ローラのオリジナル、2011、238
- ③ 加藤幹郎、岩波書店、日本映画論1933-2007テキストとコンテキスト、2011、480
- ④ 加藤幹郎 (監修)、ミネルヴァ書房、映画のなかの社会/社会のなかの映画 (映画学叢書第3巻)、2011、318
- ⑤ 加藤幹郎 (監修)、ミネルヴァ書房、映画の身体論 (映画学叢書第二巻)、2011、242
- ⑥ 加藤幹郎、岩波書店、表象と批評—映画、アニメーション、漫画、2010、238
- ⑦ 加藤幹郎 (監修)、ミネルヴァ書房、映画とネイション (映画学叢書第一巻)、2010、252
- ⑧ 加藤幹郎、臨川書店、アニメーションの映画学、2009、314

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前川 玲子 (MAEKAWA REIKO)
 京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
 研究者番号：30190292

(2) 研究分担者

若島 正 (WAKASHIMA TADASHI)
 京都大学・大学院文学研究科・教授
 研究者番号：10175060
 加藤 幹郎 (KATO MIKIRO)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：60185874

(3) 連携研究者

()

研究者番号：